

平成21年4月17日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19611013  
 研究課題名（和文） 展示制作プロセスの共有化とミュージアムリテラシーに関する実践的研究  
 研究課題名（英文）  
 研究代表者  
 氏 名：佐藤優香（Yuuka Sato）  
 所属・職：国立歴史民俗博物館・研究部・助教  
 研究者番号：40413893

## 研究成果の概要：

ラオス2都市、神戸、大阪、台湾にて展覧会を開催し、そこでの実践をもとに研究を進めた。会場ごとに、展覧会の特徴と目的を定め、それぞれに応じた、展示制作プロセスのあり方、コミュニケーション手法の開発、プロセスの記録とその手法開発、学習プログラムの開発を行った。すべての実践を書籍、写真集、映像の3つの形でまとめ、これまで主に図録としてしか記録されてこなかった展覧会を、その制作と展覧会における実際のコミュニケーションや来場者の反応に光をあてて公開することを実現した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	43,270,000

## 研究分野：博物館学

## 科研費の文科・細目：

キーワード：博物館学、教育学、民族植物学、コミュニケーション論、デザイン、情報デザイン、ミュージアム・リテラシー、学習環境デザイン

## 1. 研究開始当初の背景

美術史家のダンカン・キャメロンは、博物館にテンプル（宮殿）とフォーラム（広場）の2つのあり方が存在することを指摘した。評価の定まった資料をまるで宝を拝むように見るのがテンプル、未知なるものに出会いそこから議論の始まるのがフォーラムである。人類学者の吉田憲司は、「対話」を唯一の方法とし、そのための場として展覧会を位置づけた。

このような先行の博物館観をふまえ、本研究

では、対話からさらに歩みを進めて「創造」を「他者とかわる手法」、「博物館をひらく手法」としてとらえた。そして、博物館という場に展示空間としての役割だけをもとめるのではなく、調査から展示の開催にいたるすべてのステップをとりこんだかたちで展示プロセスをつくることを試みようとした。つまり本研究の実践により、博物館に対する視点は物理的空間から創造の媒体へと転換し、博物館における人の営みはディスカッションやコ

コミュニケーション（対話）から、クリエイションへ（創造）と発展すると考えた。

すなわち本研究の最終的な目的は、博物館の機能を至宝の供覧と成果の伝達の場合から、創造のプロセスを共有する協同活動体へ拡大することにあった。

## 2. 研究の目的

目的1：展示手法の開発（調査・収集・展示のプロセスすべてを開発チームで共有する）

資料が収集されてから、観覧に供されるまでのプロセスを解体していくと、そのステージは大きく以下の3つに分けることができる。

1)「展示資料とその情報の収集（調査収集のフィールド）、2」展示の企画とデザイン（展示開発のアトリエ）、3）展示の公開、学習プログラムの実施（学びの場としての展示場）である。

本研究では、分業によって分断されているこれら3つのステージを、その各専門家がプロセスを共有することで、新しい展示開発の手法／モデルを創出する。

目的2：展覧会にかかわるプロセスや観客の経験の共有化と外在化（ドキュメンテーション手法の開発とアーカイブ化）

調査地において収集されたモノと情報を留めておくことが、博物館における情報の蓄積方法である。

本研究では、これに加えて収蔵された後にも情報を付加し続けることで、新たなものの価値を創造していく手法の開発をめざした。つまり、展示公開することを通して人がモノとの間にどのような関係をつくったか、展示を通して観客にどのような経験と思いを想起させたのかを記録、展示場での営みが情報として蓄積され、新たな展示や学習へ応用されることを可能にしようとした。

目的3：ミュージアム・リテラシーを育むためのプログラムの開発

博物館における来館者の学びについては、教育普及活動として全国的に取り組みが見られるが、その多くは、展示内容をいかに伝達するかということを主眼にそのプログラムが作成されている。本研究では、ミュージアム・リテラシーすなわち博物館の活用の仕方、博物館的な情報活用の仕方を学ぶものとして、学習活動を位置づけその手法を開発する。

## 3. 研究の方法

展覧会を企画実施し、その実践をもとに研究を進めた。

民族植物学を専門とする落合（研究分担者）が収集した資料群を用いて、デザイナーの上

（研究協力者）と、教育学研究者の佐藤（研究代表者）が展示場におけるコミュニケーション手法を開発し、それを映像研究者の久保田（研究分担者）が記録した。ただし、それぞれの作業は担当者だけでなく、すべてのプロセスを全員で共有し、さらに展覧会ごとに異なる目的を定め現地スタッフと協働することで、展示手法の開発を試みた。

## 4. 研究成果

ラオス2都市、神戸、大阪、台湾の計5回の展覧会を企画実施した。

ラオスでは、資料点数や展覧会規模を限定することで、展覧会を企画実施するエッセンスを抽出した。とくに、コミュニケーションの手法開発に力を入れ、来場者とのやりとりをふかめたり、とどめたりするツールを開発した。

大阪では、研究の成果や手法など、社会に「研究」をひらく試みとして展覧会を位置づけた。論文や講演など専門家を対象にするのではなく、非専門家にモノを通して研究を伝える手法を開発した。

神戸と台湾では、それぞれ大学生、大学院生の講義に展覧会作りを位置づけて実施し、展覧会づくりを教育に活かす手法を開発した。

すべての展覧会において、〈目的1〉にあるように展示制作プロセスを共有した。また、展覧会をいかにしてつくり、来場者からどのような反応があったのかを書籍とビデオにまとめることで、〈目的2〉展覧会にかかわるプロセスの共有化と外在化を達成した。また、神戸の展覧会を試行とし、台湾の展覧会で学生とのプロジェクトとして展覧会づくりを行うことで、〈目的3〉のミュージアム・リテラシーを育むためのプログラムが開発された。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

佐藤優香「思い出がもたらす博物館・利用者・社会のコミュニケーション」『歴博』152号、p1、2008年、査読なし

佐藤優香「学びのためのコミュニケーションデザイン」『歴博』145号、pp26-27、2007年、査読なし

落合雪野「種子を飾る人びと—植物利用からみたタイ文化圏」『自然と文化そしてことば』3号、106-114

落合雪野「飾る植物—東南アジア大陸部山地における種子ビーズ利用の文化」、2007年、査読なし

落合雪野「生きもの博物誌 ジュズダマ—観光資源としての植物」『月刊みんぱく』11月号、p21、2007年、査読なし

落合雪野「トラベリング・ミュージアム—研究成果を共有するためのこころみ」『地域研究コンソーシアム・ニュースレター』2号、p21、2007年、査読なし

落合雪野「ミャンマー周縁部における種子ビーズ利用の文化—その創出と継承をめぐる」『東南アジア研究』45巻3号、pp 382-403、2007年、査読あり

〔学会発表〕(計7件)

落合雪野、佐藤優香「ラオスにおけるトラベリング・ミュージアムの実践」国立大学博物館協議会第2回博物科学会、2007年、九州大学

佐藤優香「コミュニケーションメディアとしての展覧会—研究者による展示づくりを通じた成果の社会還元—」全日本博物館学会、2007年6月、お茶の水女子大学

落合雪野、佐藤優香、上まりこ、久保田徹「トラベリング・ミュージアム—研究成果を共有するためのこころみ」京都大学地域研究情報統合センター共同研究会「地域研究における記述、2007年7月、京都大学

久保田徹、伊藤京子「イメージリラシーのレッスン」情報処理学会、2007年9月、大阪大学

落合雪野、佐藤優香、久保田徹、上まりこ「大学共同利用期間と大学博物館の協働による展覧会の開催—国立民族学博物館におけるトラベリング・ミュージアムの実践—」国立大学博物館協議会第三回博物科学会、2008年6月、大阪大学

佐藤優香、久保田徹、落合雪野、上まりこ「研究を伝える展示とワークショップの試み—国立民族学博物館におけるトラベリン

グ・ミュージアムの実践—」国立大学博物館協議会第三回博物科学会、2008年6月、大阪大学

久保田徹、落合雪野、佐藤優香、上まりこ「展覧会における映像ドキュメンテーションの試み—国立民族学博物館におけるトラベリング・ミュージアムの実践—」国立大学博物館協議会第三回博物科学会、2008年6月、大阪大学

〔図書〕(計2件)

落合雪野、佐藤優香、上まりこ、久保田徹『トラベリング・ミュージアムの軌跡』2008年  
上まりこ『トラベリング・ミュージアム フォトファイルズ 出会うことから生まれたできごと』2008年

落合雪野「飾る植物—東南アジア大陸部山地における種子ビーズ利用の文化」  
松井健編『資源人類学 第6巻 自然の資源化』123-159

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0件)

○取得状況(計 0件)

〔その他〕

DVD  
『トラベリング・ミュージアム ビデオドキュメント 開き繋ぐために』  
WEB

プロジェクトのwebpage

<http://tra-mu.jp/>  
国立民族学博物館(本プロジェクトの展覧会ページ)

<http://www.minpaku.ac.jp/museum/exhibition/zuzu/>

国立歴史民俗博物館(科学研究補助金の紹介ページ)

<http://www.rekihaku.ac.jp/research/subsidy/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐藤 優香(Sato Yuuka)

国立歴史民俗博物館・研究部・助教

研究者番号: 40413893

### (2) 研究分担者

落合 雪野(Ochiai Yukino)

鹿児島大学・総合研究博物館・准教授

研究者番号: 50347077

久保田 徹(Kubota Tetsu)  
大阪大学・コミュニケーションデザインセンター・特認  
講師  
研究者番号：50420427

(3) 連携研究者

上 まりこ(Ue Mariko)  
ウエマリコオフィス デザイナー